歿將士の英靈を祭る。

曩に我軍大孤山に上陸するや、諸士衝天の意氣眼中に敵軍なし、忽にして岫巖忽にして分水嶺其他各地到るところ必らず地理を峻嶺に察し、必らず敵情を溪谷に探り、能く其任に耐へ能く其職を盡し、會戰幾回激鬪幾回、敵軍如何に優勢なるも未だ曾て毫も挫屈せず、敵軍如何に頑强なるも未だ曾て暫くも倦厭せず、彈雨を冒して嶮壘に肉迫し劍花を散して堅陣を衝突し敵をして常に疲靡潰敗

せしむ、○月○日闔軍進んで柝木城を占領せんとするに際し、諸士率先最も能く奮戰敵丸雨飛の下に縱横疾驅して、終に潔く軍人最後の本分を完うし前後相共に骨を異鄕に曝らして名譽の鬼と爲る壯なる哉。

○○等常に之れを以て自から期し、亦以て諸士に期したり果然諸士は○○等の期するところに負かず而して○○等依然尙ほ存す、想ふて此に至る○○等感慨胸に塞がる、嗟呼忠勇なる我將校叱咤の

聲尚ほ耳に存し、猛烈なる我士卒奮闘の狀且つ眼に在り、而して今や幽明界を異にす、何ぞ哀悼に堪ゆべけんや。

嗟呼○○等誠恒悃惻仰ひで在天の英靈に告ぐ、庶幾くば髣髴として大荒より來り饗けよ。

＊　＊　＊　＊　＊

◉南山招魂祭々文

維時明治三十有七年○月㊐日、○○軍○○等壇を南山最高の頂上に設け、恭しく征露將校下士卒及び軍屬陣歿諸士の英魂を祭る。

謹で惟るに本年二月、日露交渉斷絶宣戰の大詔降下す、是に於て乎、皇軍水陸二時に並進し風掃電擊、五月二十六日を以て遂に敵の堅壘南山を陷る。抑も南山は旅順要塞の第一前衞なり、敵が最新科學を應用し、永久占領の目的を以て十分に準備し、築造したる堡壘なり、然かも地雷、鹿柴、鐵條網等の有らゆる諸種の障碍物を設備して優に皇軍を扼止し得んと誇りたる堅壘なり、其砲數よりする

も其地形よりするも、天然人工共に優勝を占め、敵は到底皇軍進攻の不可能なるを信じ居れり。果然敵壘は容易に拔けざるなり、進擊又進擊、突貫又突貫、機關砲の彈丸驟雨の如く破裂彈の爆響雷轟も啻ならず、寸進尺退死傷續出慘絶愴絶彈丸殆んど盡きて敵の鋭鋒猶ほ衰へず、晨より暮に至るまで激戰苦鬪拾有六時間の長時間を經て始めて敵壘を陷るることを得たり。

嗚呼我忠勇なる諸士は此間に猛進し、此間に激鬪して以て王事に斃る傷い哉。

南山一たび陷りて金州半島既に我有と成る、これより以後敵師遠く北に逃れて旅順全く孤守す、陣歿諸子の勳績其れ偉なる哉。

嗚呼人世誰れか死なからん、死或は泰山より重く、或は鴻毛より輕し、諸士屍を原野に曝らして名を萬世に傳ふ蓋し諸士の如きは死して餘榮ありと謂ふべし、嗚呼諸士亦以て瞑すべき哉。

戰時祭儀備らず、聊か清酌庶羞を具す、在天の英

魂尚くば髣髴として來り饗けよ。○○等謹で白す。

＊　＊　＊　＊　＊

◉金州鎭魂祭々文

維時明治三十七年○月○日、出征第二軍○○等我忠勇なる從軍戰死諸氏の靈に告ぐ、我軍遠く此地に進み一擊の下に金州城、扇子山の要害を拔く、抑も此地は敵の恃んで難攻不落と爲すところにして天險人禦實に破り易からざりき、然るに我軍の精鋭なる死するを知りて生くるを知らず、進むを

知りて退くを知らず、健鬪苦戰一日にして攻陷す、是れ誠に我　皇の稜威の然らしむるところと雖も、亦實に戰死者諸氏奮戰致死の精忠至誠に因らずんばあらず、嗚呼國家の爲めに一身を拋ち芳名を萬世に傳ふるは軍人の本分、況んや强敵を挫じきて國威を海外に耀す、亦男兒の光榮、嗚呼忠烈英武なる我陣歿の諸氏、死して遺憾なかるべし、魂や尚くは瞑せよ。

＊　＊　＊　＊　＊

◉大石橋戰死者を祭る辭

明治三十七年七月二十三日、我が皇軍は蓋平附近の陣地を發し、各縱隊は少數の敵兵を掃攘しつつ前進し、大石橋の敵地を占領せんとし、途々小戰をなしつつ總攻擊の準備をなせり、翌くれば二十四日、未明、我が軍の右翼たる諸團體は、互に相關連して均しく運動を起し、太平嶺及び其の西方の高地を前進して廣大なる地區を占領す、時に敵の砲兵は盛んに我れに向つて射擊す、然れども我

が砲兵は地形困難の故を以て未だ應戰し得ざる陣地に進入すること能はず、且つ彼れの防護最も堅固にして、我が軍苦戰甚だ力めたり、〇〇團隊の如きは非常の勇氣を以て一たび敵の陣地に突入したりと雖も、其陣地頗る堅固なるのみならず、優勢の敵に逆襲せられ、再び舊位置に引退するの止むなきに至れり、是に於て、右翼隊の司令官は軍司令官の意圖を實行せんがために遂に夜襲を斷行するの決心をなし、軍司令官これを許す、依り

て右翼隊司令官は午後十時、歩兵の大部を擧げて之を決行す、而して歩兵は勇奮突進、最も堅固なる敵の陣地に突入し、終に其の第一堡壘を略し、多數の損害を被りしに拘はらず、更に勇を鼓して第二堡壘に突入し、以て之を占領したり、時に午前三時なりき。抑も大石橋の地たるや、東清鐵道の分岐點にして、右すれば營口を經て山海關に達し、左すれば旅順、青泥窪に至るべく、若し此の地にして我軍の略取するところとならんか、牛莊、

營口は爲めに保持すること能はず、實に敵軍に於いて最も防禦を嚴にし、以て死守したるのところなりき。然るに我が軍の大夜襲に會ひて支離滅裂、敵は海城に向つて敗走したり、是れ專ら夜襲の奇功を奏したるに依らずんばあらざるなり。其の偉功や實に戰史上に一大新紀元を開きたるものにして、此の役に於ける戰死者は、僅に百六十名に過ぎず、その名譽の戰死を以て此の地を占領するに至れるを想へば死者の榮や實に大なりと云ふべ

し、今や戰場に於て事意の如くならずと雖も、茲に戰友相會し、以て勇者の靈を祭り、清酌庶羞の典を擧ぐ、諸子以て瞑すべきなり、○○等靈前に跪き恭しく白す。

＊　＊　＊　＊

◉遼陽役戰死者を祭る辭

維時明治三十七年○月○日、○○に於て地を淨め、壇を設け、聊か菲薄の典を供へ、以て遼陽の役に於ける名譽の戰死者諸君の靈を祭る。

抑も遼陽の大勝たるや、嘗て期したる所なりと雖も、其の戰ひは彼我首力の決戰にして、其の如何に依りて關連するところ甚だ重大なるものあり、今や捷利を得たるのみならず、而も其の進行の迅速なりしは、殆んど意外の感なきを得ず、敵の兵力は十二三個師團約二十餘萬の大數にして、彼が開戰の前後より極力滿洲に集中したる兵力にして、其の數決して少なからずと雖も、三道より併進したる我が軍に對し、堅固なる陣地に據りて、

極めて頑強なる抵抗を試みたりと雖も、猛烈果敢なる我が軍の攻撃に堪へずして、遂に其の陣地を棄てて潰走するに至りしは我が作戰計畫の巧妙にして、彼が兵の弱きが爲めか、是れ言はずして自から明かなり。夫れ敵軍が三月以來、半歲に餘れるの間、極力防禦をとのへ、兵力を集め、一大決戰を期したる其の陣地を以て、我れに對して僅々數日の攻擊に堪へず、首力を擧げて潰走するに至れり。而して斯くのごとき大兵が、一旦潰走

混亂して、我が軍の猛烈なる追擊要擊を受けしことなるを以て、其の損害の非常なるは、實に想像の外に在り、これ恰も佛蘭西軍の莫斯科退却と異ならざる窮狀を露はさざるを得ず、而も尙ほ彼は爾後何れの地に據りて我が軍に抗せんとするか、是れ固より知るべからずと雖も、半歲間に於ける計畫は殆んど此の一舉に打擊せられたるものにして、戰局の大勢は既に決したるに似たり。想ふに露國は其の地積頗る廣大にして、軍隊の如きも多

數を有すれば、遼陽に於ける大敗の爲めに容易に屈するものにあらず、その本國よりは益々送兵し、再舉を計るの策に出づるは論を俟たざるべし、是れ國の面目を保維せんがため然かせざるを得ざるべければなり。然れども如何に新來の精鋭を集中すと雖も、兵氣大に沮喪し、以て風聲鶴唳に驚くこと敢て珍らしからざらん。然れば彼れは益々退却して、遂に我が軍の鋭鋒を避くるの策に出づるあるのみ、是れ遼陽の役に於ける戰死諸君の偉功

にして、國民の永く記憶に止まるは勿論、芳名を竹帛に垂れ、千載の下、其の功績を敬仰せざるものあらんや、茲に恭しく魂を招ぎ、以て祭典を擧ぐ、英靈尚くば之を饗けよ。

＊　＊　＊　＊　＊

◉旅順口殉難者を吊ふ

維時明治三十八年一月十四日、第三軍司令官乃木希典等、清酌庶羞の典を以て、第三軍殉難將卒諸子の靈を祭る、曩きに我軍の關東半島に上陸せ、

しより以來茲に二百十有餘日、其間諸子は克く勇往し、克く健闘し、鋒鏑砲火の下に命を致し、或は風雪雨虐の間に病歿せしもの尠しとせず、而も其功業竟に空しからず、茲に旅順港内敵艦隊の全滅に歸し、敵要塞の降伏を見るに至りしもの、洵に諸子の遺烈に倚る、希典等諸子と生死を共にし、而も生きて　大元帥陛下より優渥なる勅語せらるるに會ひ、顧みて諸子が偉烈を思ひては、豈獨り自ら光榮を享るに忍びんや、嗚呼諸子と此光榮を頒

たんとして幽冥相隔つ哀哉、則ち殘軍の旅順口に入るも、諸子が忠血を以て染めたる山川と要塞下を下蹶する處を相し、先づ地を清め、壇を設けて諸子が英魂を招ぐ、庶幾は魂や髣髴として來り饗けよ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

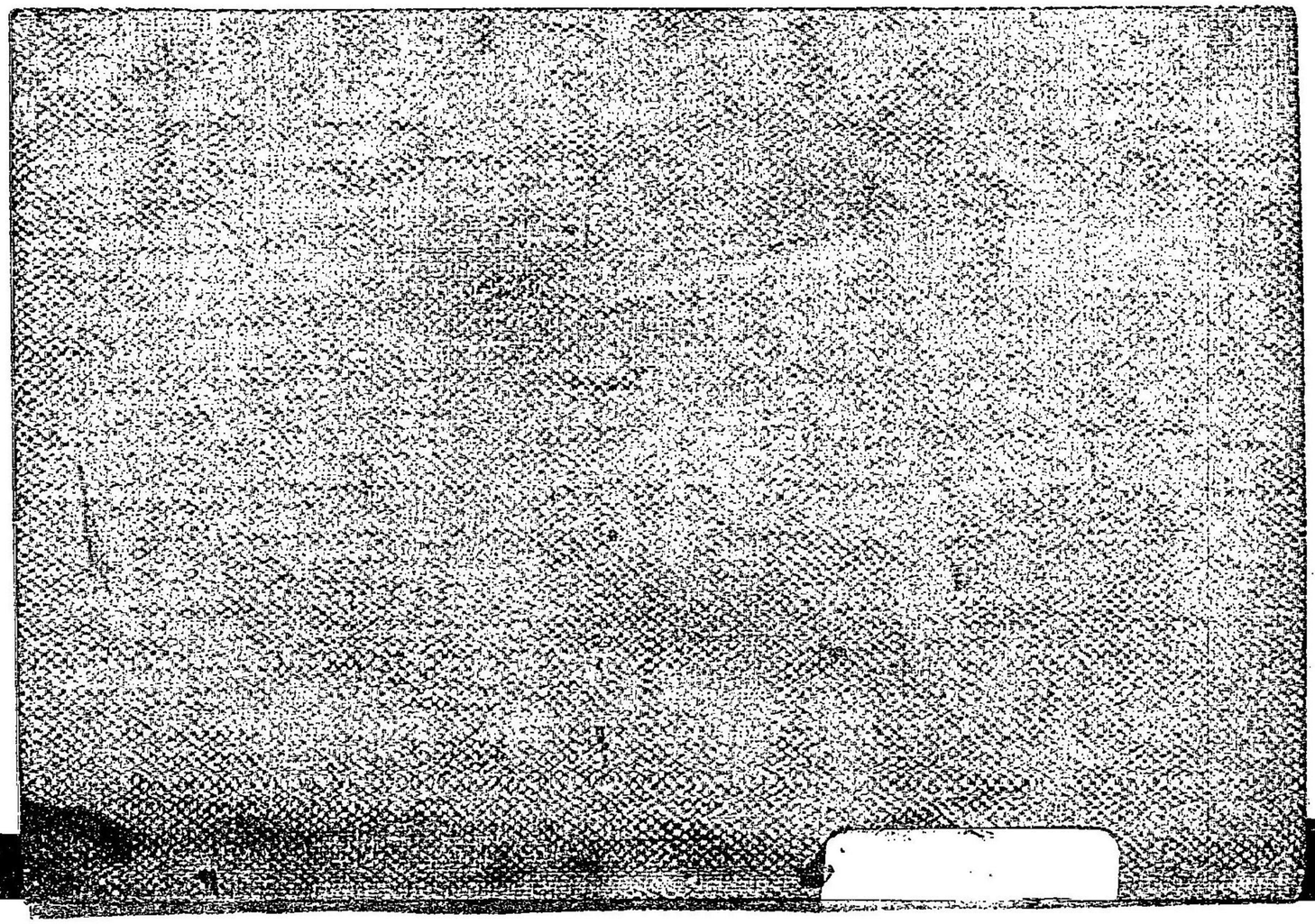
最新祝賀弔祭文例(終)

明治三十八年十月廿一日印刷
明治三十八年十一月廿五日發行

發行者　東京市京橋區南紺屋町十八番地　小川寅松

發賣者　東京市神田區美土代町三番地　富田熊次

印刷者　東京市京橋區築地二丁目三十番地　川崎佐吉



本會は茲に
天長節の　佳辰に際し、遙かに出征軍人に對し、
謹で感謝の誠意を表す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉陸軍に對する感謝狀

我陸軍一たび海を渡りてより連戰連捷堅壘を陷れ、勁敵を摧き、九連、南山、得利寺の奇捷を博し、遂に敵帥を其本據より驅逐して遼陽の要地を占領し、更に沙河の大捷を得て、敵をして旅順救

援の計畫を沮撓せしむ、全露爲めに震怖し、列國等く我武を稱揚す、内は以て國民の自信を鞏くし、外は以て國威を世界に伸ぶ、將校の智謀と軍隊の勇武とによらざれば焉ぞ此偉功を奏するを得んや、是れ國民の感謝して措かざる所なり。

陸軍々人の艱難は唯敵と砲火の間に奮鬪するのみに非ず、險阪を跋み、大河を渉り、重きを荷ふて泥濘を往き、霖雨を冒して山野に露宿す、久しく炎熱に耐へて又苦寒を忍ばざる可からず、是れ國